






病害虫発生予察情報予報第1号(5月の予報)


佐賀県農業技術防除センター

I. 予報の概要および各作物の特記事項

作物名	病害虫名 ^{注1)}	5月の予想発生量 ^{注2)}		病害虫防除のてびきの記載頁 ^{注3)}	予報対象の病害虫 (抜粋)	
		平年比	前年比			
水稲 (早期・早植え)	いもち病	やや少	並	126~135 137~142	 いもち病	
	ばか苗病	並	並	126~135		
	イネミズゾウムシ	並	並	170~171		
	1. 病害虫全般(いもち病、トビイロウンカ等) 育苗箱施用剤は、防除効果を確保するため、適正量をむらなく処理する。					
水稲 (普通期)	1. いもち病 種子消毒を徹底する。また、育苗箱で種籾が露出すると本病が発生しやすいため、覆土を適正に行う。 2. もみ枯細菌病 種子消毒を確実に実施する。さらに育苗箱の覆土前にカスガマイシン液剤の散布を行うと有効である。					
タマネギ	べと病	中晩生	並	並	260~263	 べと病
	ボトリチス葉枯症		やや少	少	264	
	ネギアザミウマ		多	やや多	271~272	
	1. べと病(中晩生) 中晩生品種では、5月上旬まで二次伝染による感染リスクがあるので、早生品種の収穫中であっても、定期的な薬剤防除を切れ目なく実施する(令和3年4月7日付け病害虫対策資料第1号参照)。 2. ネギアザミウマ 発生が平年より多い。本虫は薬液のかかりにくい葉の隙間に寄生しているので、薬剤は十分量を用いる。なお、本虫の食害によりできた傷口から腐敗病等の病害が発生しやすくなるので、防除を徹底する。					
イチゴ (育苗圃)	ハダニ類		多	多	211~212	 ハダニ類
	うどんこ病		やや少	並	201~203	
	アブラムシ類		並	並	216~217	
	1. ハダニ類 親株での発生が多い。次作の本圃での発生を抑えるため、育苗期の防除を徹底する。薬剤防除には、薬剤抵抗性の発達の可能性が低いとされる気門封鎖系薬剤を活用する。ただし、これらの薬剤は卵に対して効果が無いものが多いので、5~7日間隔での2回散布を1セットとし、発生状況に応じて数セット散布する。 2. 炭疽病、疫病、萎黄病 健全苗を育成するため親株床から薬剤防除を実施し、発病株を認めた場合は、早急に圃場外に持ち出し適切に処分する。 特に炭疽病については、病原菌の伝染を防止するため、ビニル雨よけ育苗を行い、定期的な薬剤防除を実施する。また、灌水を過度に行うと、高湿度条件が長時間維持され、発病が助長されるため、灌水はその日の天候やポットの乾き具合を考慮して実施する。					

作物名	病虫害名 ^{注1)}	5月の予想発生量 ^{注2)}		病虫害防除のてびきの記載頁 ^{注3)}	予報対象の病虫害 (抜粋)
		平年比	前年比		
キュウリ	べと病	やや少	やや少	180~181	 キュウリ黄化えそ病
	うどんこ病	少	並	178~179	
	褐斑病	やや少	並	183~184	
	灰色かび病	並	並	181~182	
	アザミウマ類	やや少	やや少	193	
	コナジラミ類	やや少	並	192	
1. ミナミキイロアザミウマ：黄化えそ病、タバココナジラミ：退緑黄化病 媒介虫の薬剤防除を徹底するとともに、ウイルス病の罹病株を認めた場合は、早急に除去し処分する。					
トマト	葉かび病	少	少	228~229	 タバココナジラミ
	灰色かび病	やや少	並	223~224	
	コナジラミ類	やや多	やや多	152~154 231~233	
1. 黄化葉巻病 一部の圃場で発生が見られる。発病株は抜き取り、適切に処分するとともに、媒介虫であるタバココナジラミの防除を徹底する。					
アスパラガス	茎枯病	並	並	313~314	 ネギアザミウマ
	褐斑病	並	並	315	
	斑点病	並	並	314~315	
	アザミウマ類	並	少	317~318	
1. 茎枯病、褐斑病、斑点病 各病害とも予防散布を基本とし、発生前から3週間間隔を目安として薬剤防除を実施する（前年多発生圃場及び既発生圃場、降雨日が続く場合は間隔を短縮）。特に、茎枯病については、降雨時にサイドビニルを降ろし、雨の降込みを防ぐとともに、発病茎は見つけ次第、除去し適切に処分する。					
2. アザミウマ類 気温の上昇に伴い、施設外からの飛び込みが多くなるため、虫見板への払い落とし等を行い、発生状況に注意し、早期防除に努める。					

作物名	病虫害名 ^{注1)}	5月の予想発生量 ^{注2)}		病虫害防除のてびきの記載頁 ^{注3)}	予報対象の病虫害 (抜粋)
		平年比	前年比		
果樹全般	果樹カメムシ類	少	少	250~253	
	1. 病虫害対策 本年は2月以降気温が高く、果樹類の生育は露地栽培では平年より10日程度早く推移している。病虫害の防除対策が適時に行えるよう、こまめな圃場観察と早めの準備を心掛ける。 2. スピードプレイヤーによる薬剤散布 全列走行を基本とする。なお、薬液が到達しにくい園周縁部等は手散布などにより、丁寧に散布する。				
カンキツ	そうか病	並	並	220~222	 ミカンハダニ
	かいよう病	並	並	224~226	
	灰色かび病	並	並	226~227	
	ミカンハダニ	多	多	245~247	
	1. ミカンハダニ 一部園地で多発生が続いている。殺ダニ剤に対する感受性低下を防ぐため、4月~6月下旬はマシン油乳剤の使用を基本とする。ただし、樹勢が低下している樹や着花が少ない樹では、マシン油乳剤の散布を控え、殺ダニ剤散布で対応する。 2. 開花期の防除（灰色かび病、訪花昆虫） 本年は開花が早く推移している。園内をよく観察し、開花状況にあわせて適期に薬剤散布を行う。また、灰色かび病が問題になる園や着花量が多い園では、薬剤防除及び古い花卉の除去を徹底する。 3. かいよう病 6月までは本病の重要な防除時期であり、今後の多発生を防ぐため、本病が発生しやすい園および幼木園では防除を徹底する。				
ナシ	黒星病	並	並	288~291	
	1. チュウゴクナシキジラミ 越冬成虫の次世代成虫（夏型成虫）が平年より早く確認されている。園内をよく観察し、発生初期からの防除を徹底する。また、ネオニコチノイド系薬剤に対する感受性が低い個体群が確認されているため、効果の低下が疑われる場合は、異なる系統の薬剤（ディアナWDG等）を散布する（4月21日付け病虫害対策資料第2号参照）。 2. 黒星病 5~6月中旬までの薬剤防除は、原則的に保護殺菌剤を使用する。ただし、長雨等で薬剤散布ができなかった場合はDMI剤を散布する。				
ブドウ	黒とう病	並	並	333~335	
	べと病	並	並	336~338	
1. 果粒の汚れ及び果粉の溶脱の防止 袋かけ前（大豆大期）に薬剤防除を行う際は、果粒の汚れ及び果粉の溶脱が少ない薬剤を選定する。					
キウイフルーツ	1. かいよう病 感染防止のため、6月までは <u>すべての園において</u> 、銅水和剤を主体とした 定期的な薬剤防除を実施 する。なお、幼木は成木に比べ発病しやすく、また枝枯れや樹液の漏出など症状がひどく出やすいため、特に防除対策を徹底する。				 葉の斑点症状

作物名	病虫害名 ^{注1)}	5月の予想発生量 ^{注2)}		病虫害防除のてびきの記載頁 ^{注3)}	予報対象の病虫害 (抜粋)
		平年比	前年比		
茶	カンザワハダニ	やや少	並	418~419	 カンザワハダニ
	クワシロカイガラムシ	並	やや多	425~426	
	チャノキイロアザミウマ	並	並	424~425	
	チャノミドリヒメヨコバイ	並	並	423~424	
	チャノホソガ	並	並	421	
	1. カンザワハダニ 被覆栽培はカンザワハダニの発生を助長する傾向にあるため、一番茶の摘採が遅い園では圃場観察を徹底し、農薬の使用基準に注意して防除を行う。また、一番茶摘採後においても本種の発生が見られる園では追加防除を実施する。				
2. クワシロカイガラムシ 幼虫ふ化期は5月中~下旬頃である。園内の発生ふ化状況を観察し、ふ化最盛期に防除を実施する。					
3. チャトゲコナジラミ 第一世代若齢幼虫の発生期となる5月中~下旬頃にクワシロカイガラムシと同時防除を行う。					
4. ナガチャコガネ 羽化期~成虫発生初期にあたる二番茶の萌芽開葉初期（5月下旬~6月中旬頃）が、防除適期であるため、発生圃場では薬剤防除を実施する。					

注1) 病虫害名に網掛けをしたものについては、予報の根拠とした内容を記載しています。

注2) 予想発生量については、平年および前年との比較により記載しているため、実際の発生量とは相違を生じる場合があります。例えば、例年の発生量が少ない病虫害について「平年および前年より多い」と予想した場合であっても、実際の発生量は多くない場合があります。

注3) 防除対策については「[佐賀県病虫害防除のてびき](#)」も参照してください。

II. 予報の内容・根拠等について

予報内容（来月の予想発生量）

- 平年（過去10年間）及び前年と比較し「少、やや少、並、やや多、多」の5段階で示しています。
なお、少発生が予想される病害虫等については、予報の概要のみの記載となる場合があります。

予報内容の根拠

- 農業技術防除センターが実施する県内各地での調査、防除員の調査、予察灯・トラップでの誘殺状況調査等に基づく発生現況、気象予報からみた病害虫の発生条件等を基に、関係者による発生予察会議で決定します。
○ 発生現況および気象条件が来月の病害虫の発生に及ぼす影響については、（－）：少発生、（－～±）：やや少発生、（±）：並発生、（±～＋）：やや多発生、（＋）：多発生として示しています。

防除上注意すべき事項

- 各病害虫を防除する上で特に注意すべき事項等を記載しています。なお、全般的な防除対策については「県防除のてびき」をご参照ください（1ページの予報の概要にリンク有り）。

写真

- 1～4ページ目：予報で対象とした病害虫を抜粋して掲載しています。
6ページ目以降：定期調査時の各作物の生育状況を掲載しています。

5月の気象条件

- 病害虫の発生に関与する5月の気象条件については、福岡管区気象台発表の1ヶ月予報（令和3年4月15日）を基に、「気温：平年並」、「降水量：平年よりやや少ない」と判断しています。

気象予報による要素別確率(%)及び病害虫の発生に関与する気象条件

要素	1ヶ月予報における5月の気象予報（確率予報%）			病害虫の発生に関与する気象条件（平年比）
	低い(少ない)	平年並 (佐賀市の平年値)	高い(多い)	
気温	30	30 (19.5℃)	40	並
降水量	40	40 (198 mm)	20	やや少ない

Ⅲ. 5月の予報

水稻(早期・早植え)

1. いもち病 [【概要に戻る】](#)

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 前年の穂いもちの発生状況

令和2年産水稻での穂いもちの発生は、上場地域の早期水稻および北部山間の早植え水稻のいずれも平年よりやや少なかった。〈一～±〉

(2) 5月の気象予報

降水量はやや少なく、やや少発生の条件〈一～±〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 苗いもちがみられたら、早急に取り除くとともに防除を行う。

(2) 水田周辺に放置された予備苗から葉いもちが蔓延することがあるので、補植後は早急に取り除く。

(3) その他については、特記事項を参照する。

2. イネミズゾウムシ

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 前年の発生状況（越冬密度）

前年の発生は平年よりやや少なく、越冬密度は平年よりやや少ないと考えられる。〈一～±〉

(2) 5月の気象予報

気温は並で、並発生の条件〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 例年発生が多い地域では、本虫に登録のある育苗箱施薬剤を使用する。

(2) 越冬成虫は4月中旬～6月上旬に水田へ侵入する。本田での発生状況の把握に努め、成虫が10株当たり5頭以上みられたら、防除を実施する。

タマネギ

定期調査 早生3圃場、中晩生10圃場

調査日：4月15、19日

1. ベと病（中晩生） [【概要に戻る】](#)

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1参照）

発生株率：11.0%（平年20.1%、前年18.4%）

平年比：並〈±〉 前年比：並〈±〉

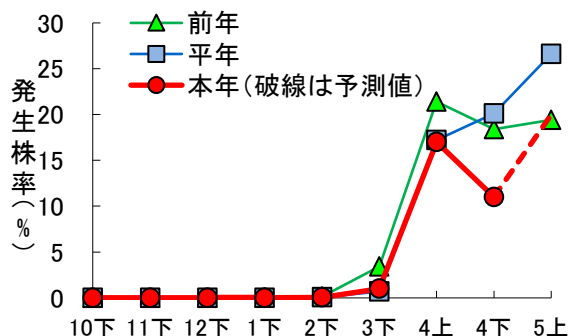


図1 中晩生タマネギでのべと病の発生推移

(2) 感染好適気象条件の出現状況 (図2参照)

県内及び隣接県の気象観測地点計4地点での2月11日～4月18日の気象解析では、3月30日以降、感染・準感染好適条件はほとんど発生していない(図中に点線囲いで表示)〈一～±〉

(3) 5月の気象予報

降水量はやや少なく、やや少発生の条件〈一～±〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照。

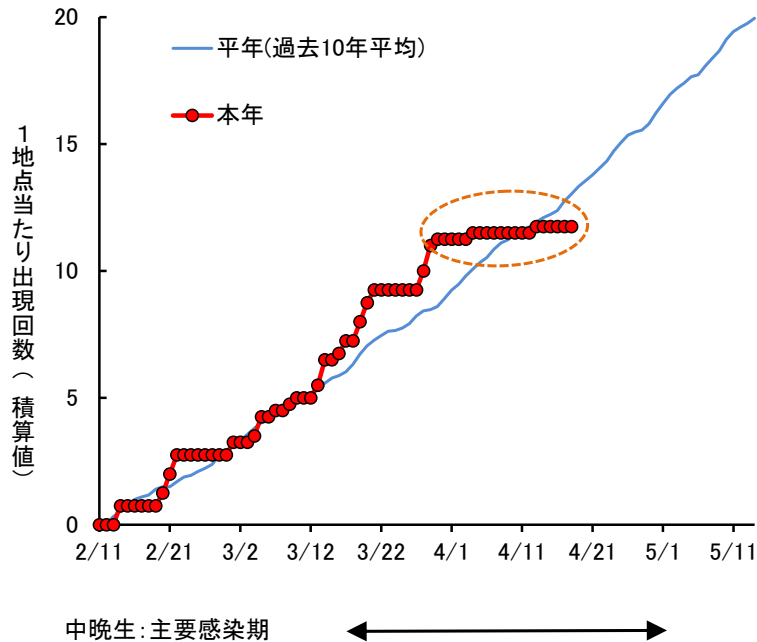


図2 タマネギべと病の感染・準感染好適気象条件の出現延べ回数

注1) 1地点当たりの感染・準感染好適条件の出現回数の積算値を示した。

注2) 感染・準感染好適条件が現れた場合、感染株では約2～3週間後から、初発生あるいは発病株(病斑数)の増加が予想される。

2. ボトリチス葉枯症

1) 予報の内容

発生量: 平年よりやや少ない (前年より少ない)

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1 参照)

発生株率: 0% (平年 10.3%、前年 17.4%)

平年比: やや少 〈一～±〉 前年比: 少 〈一〉

(2) 5月の気象予報

降水量はやや少なく、やや少発生の条件〈一～±〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 発生を認めた場合には、速やかに薬剤防除を実施する。

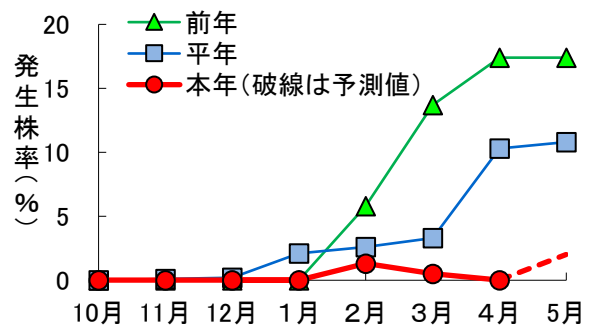


図1 タマネギボトリチス葉枯症の発生推移

3. ネギアザミウマ

- 1) 予報の内容
発生量：平年より多い（前年よりやや多い）
- 2) 予報の根拠
 - (1) 発生の現況
 - ① 定期調査（図1参照）
発生株率：30.5%（平年11.4%、前年15.7%）
平年比：多<+> 前年比：多<+>
 - (2) 5月の気象予報
気温は並、降水量はやや少なく、並発生の条件<±>
- 3) 防除上注意すべき事項
 - (1) 特記事項を参照。

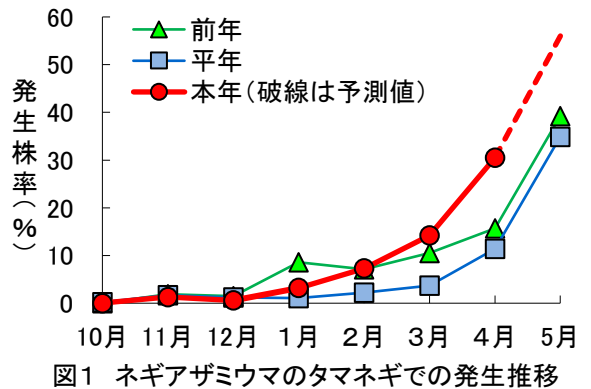


図1 ネギアザミウマのタマネギでの発生推移

イチゴ（育苗圃）

定期調査8圃場
調査日：4月14～15日



定期調査圃場の様子

1. ハダニ類

[【概要に戻る】](#)

- 1) 予報の内容
発生量：平年より多い（前年より多い）
- 2) 予報の根拠
 - (1) 発生の現況
 - ① 定期調査（図1参照）
発生株率：15.5%（平年2.7%、前年6.7%）
平年比：多<+> 前年比：多<+>
 - (2) 5月の気象予報
気温が並で、並発生の条件<±>
- 3) 防除上注意すべき事項
 - (1) 圃場によりハダニ類の薬剤感受性が異なるため、防除効果を確認し、薬剤を選定する。
 - (2) 薬剤防除の際は、下葉や葉裏まで薬液が付着するように十分量を丁寧に散布する。
 - (3) その他については、特記事項を参照する。

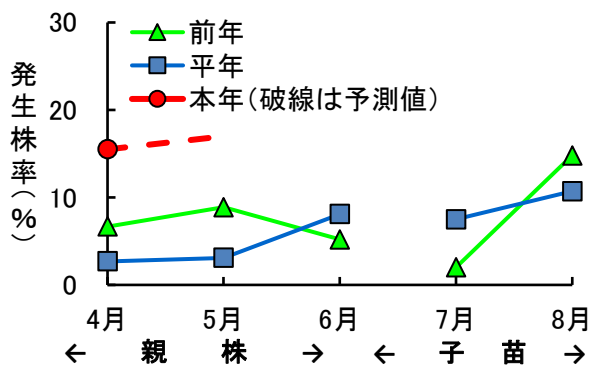


図1 ハダニ類のイチゴでの発生推移

2. うどんこ病

- 1) 予報の内容
発生量：平年よりやや少ない（前年並）
- 2) 予報の根拠
 - (1) 発生の現況
 - ① 定期調査（図1参照）
発生株率：0%（平年3.8%、前年0%）
平年比：やや少<-~±> 前年比：並<±>
 - (2) 5月の気象予報
降水量が平年よりやや少なく、やや少発生の条件<-~±>
- 3) 防除上注意すべき事項
 - (1) 親株での薬剤防除を徹底する。

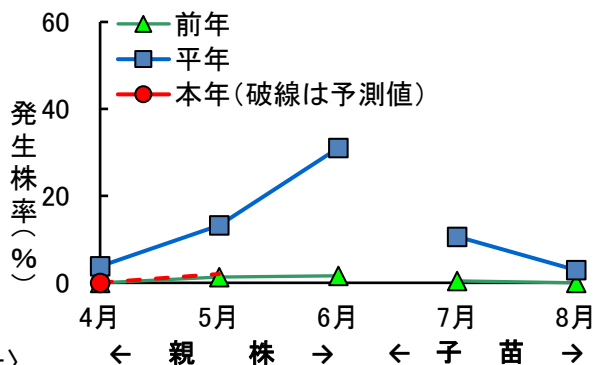


図1 イチゴうどんこ病の発生推移

キュウリ

定期調査5圃場
調査日：4月14～15日

1. アザミウマ類

[【概要に戻る】](#)

1) 予報の内容
発生量：平年よりやや少ない（前年よりやや少ない）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1参照）

発生株率：4.0%（平年9.5%、前年9.0%）

平年比：やや少（-～±） 前年比：やや少（-～±）

(2) 5月の気象予報

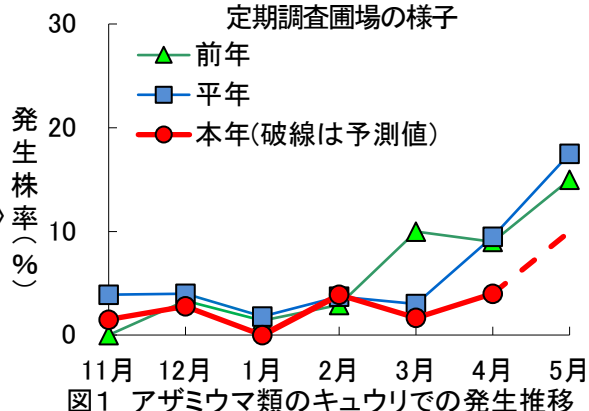
気温が並で、並発生の条件（±）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照。



定期調査圃場の様子



トマト

定期調査6圃場
調査日：4月12～15日

1. コナジラミ類

[【概要に戻る】](#)

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1参照）

発生株率：9.2%（平年5.6%、前年1.7%）

平年比：やや多（±～+） 前年比：多（+）

(2) 5月の気象予報

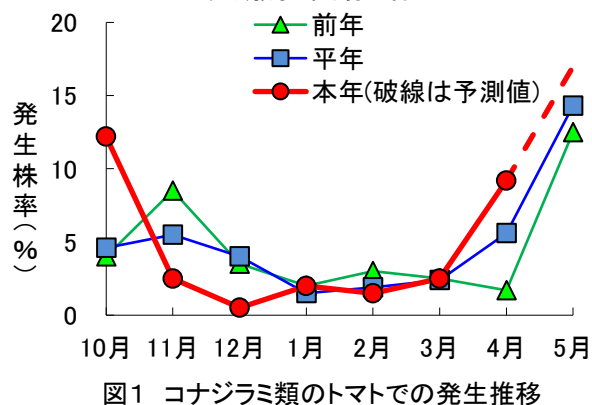
気温が並で、並発生の条件（±）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照。



定期調査圃場の様子



アスパラガス

定期調査8圃場
調査日：4月12～15日

1. 茎枯病

[【概要に戻る】](#)

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1参照）

発生茎率：0%（平年0%、前年0%）

平年比：並（±） 前年比：並（±）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照。



定期調査圃場の様子

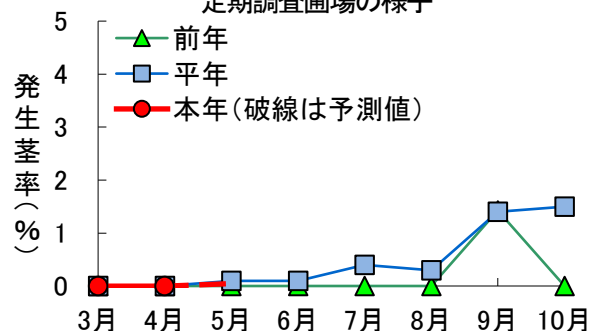


図1 アスパラガス茎枯病の発生推移

2. アザミウマ類

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年より少ない）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1参照）

発生株率：8.1%（平年8.7%、前年1.4%）

平年比：並（±） 前年比：やや多（±～+）

(2) 5月の気象予報

気温が並で、並発生の条件（±）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照。

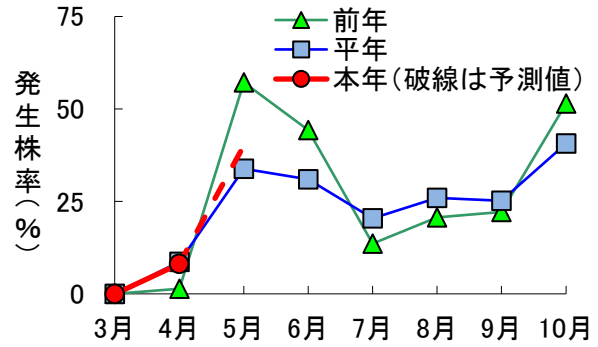


図1 アスパラガスでのアザミウマ類の発生推移

果樹全般

1. カメムシ類

[【概要に戻る】](#)

1) 予報の内容（4月～8月上旬）

発生量：平年よりやや少ない（前年より少ない）

2) 予報の根拠

(1) チャバネアオカメムシの越冬状況調査（表1）

① 越冬地点率：18.8%（平年40.6%、前年75.0%）

平年比：少ない（-） 前年比：少ない（-）

② 平均越冬虫数：0.12頭/m²（平年0.29頭/m²、前年0.60頭/m²）

平年比：やや少ない（-～±） 前年比：少ない（-）

・地点別データ等は令和2年度病害虫発生予察情報第12号（4月の予報）を参照。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 圃場をよく観察し、飛来を確認したら防除を行う。

カンキツ

定期調査8圃場

調査日：4月14～15日

1. そうか病

[【概要に戻る】](#)

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1参照）

発生葉率：0%（平年0%、前年0%）

平年比：並（±） 前年比：並（±）

(2) 5月の気象予報

降水量がやや少なく、やや少発生の条件（-～±）



定期調査圃場の様子

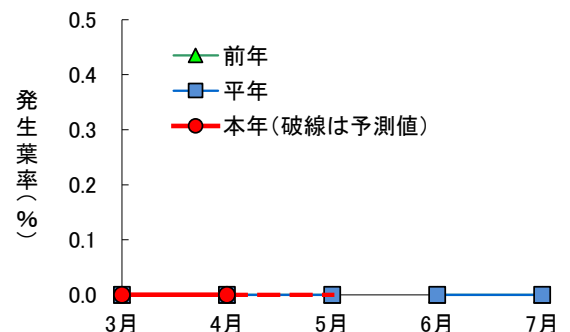


図1 カンキツそうか病の発生推移

注) 5月下旬までは旧葉を調査

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 果実への感染を防止するため、落弁期に防除を行う。
- (2) 果実に薬害を生じる場合があるため、落弁期以降にデランフロアブルとマシン油乳剤の混用又は近接散布は行わない。

2. かいよう病

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1参照）

発生葉率：0%（平年0%、前年0%）

平年比：並（±） 前年比：並（±）

- (2) 昨年9～10月の定期調査において一部圃場で発生を確認しており、園内の菌密度が高まっていると推察される。（±～+）

(2) 5月の気象予報

降水量がやや少なく、やや少発生の条件（-～±）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 前年に発生した園や風当たりが強い園、罹病性品種（レモン、ネーブル、はるみ等）の植栽園、新梢の伸長が遅くまで続く園（幼木園、高接園、隔年交互結実栽培園等）など発生が問題となる園では、無機銅剤水和剤（クレフノン200倍加用）またはICポルドー66D（アビオンE1,000倍加用）で定期的に防除を行う。散布間隔の目安はクレフノン200倍加用無機銅水和剤で20～25日で、ICポルドー66Dの場合は30日とする。
- (2) ICポルドー66Dは、展葉期に単剤で散布すると、葉に石灰による薬害が発生するので、散布する際はアビオンE1,000倍を必ず加用する。

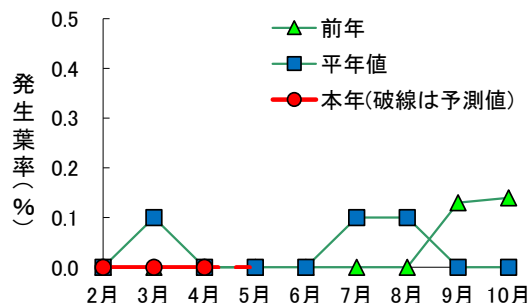


図1 カンキツかいよう病の発生推移

注) 5月下旬までは旧葉を調査

3. ミカンハダニ

1) 予報の内容

発生量：平年より多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1参照）

発生葉率：13.0%（平年5.4%、前年0.5%）

平年比：多（+） 前年比：多（+）

(2) 5月の気象予報

気温が並、降水量がやや少なく、並発生の条件（±）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 特記事項を参照

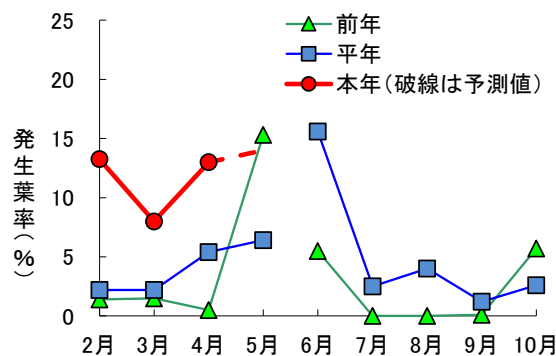


図1 ミカンハダニのカンキツでの発生推移

注) 5月下旬までは旧葉を調査

ナシ

定期調査4圃場
調査日：4月15日

1. 黒星病

[【概要に戻る】](#)

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）



定期調査圃場の様子

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1、2 参照)

発生葉率：0% (平年0%、前年0%)
 平年比：並 (±) 前年比：並 (±)
 発生果率：0% (平年0%、前年0%)
 平年比：並 (±) 前年比：並 (±)

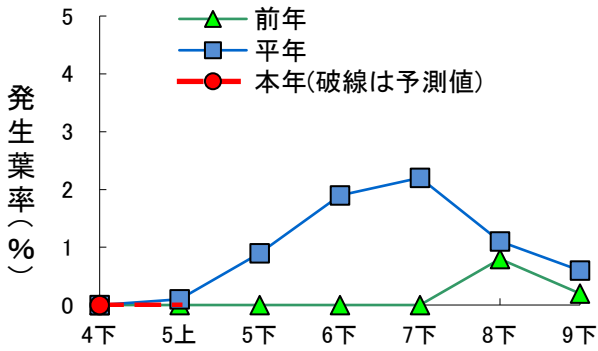


図1 ナシ黒星病 (葉) の発生推移

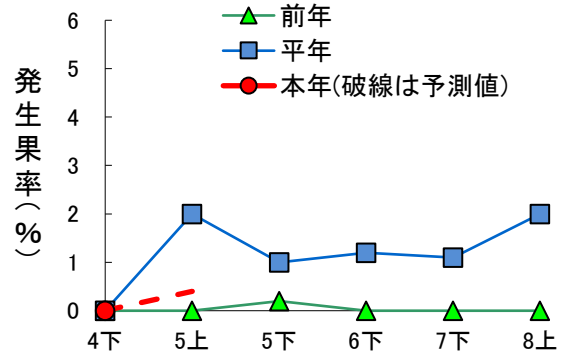


図2 ナシ黒星病 (果実) の発生推移

(2) 主要感染期である開花期前後 (本年3月20~4月10日) の気象 (伊万里市のアメダスデータ)

平均気温はやや高く、降雨量は平年より少なかったことから、やや少発生の条件で推移したと考えられる。
 (一~±)

平均気温：13.9℃ (平年11.4℃、前年12.6℃) 降雨量：75.0mm (平年119.4mm、前年159.5mm)

(3) 5月の気象予報

降水量がやや少なく、やや少発生の条件 (一~±)

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照。

ブドウ

定期調査5圃場
 調査日：4月14~15日



定期調査圃場の様子

1. 黒とう病

[【概要に戻る】](#)

1) 予報の内容

発生量：平年並 (前年並)

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1 参照)

発生葉率：0% (平年0%、前年0%)
 平年比：並 (±) 前年比：並 (±)

(2) 5月の気象予報

降水量がやや少なく、やや少発生の条件 (一~±)

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 罹病枝の剪除と巻きひげの処分を徹底する。
- (2) 新梢・新葉への感染を防ぐため、萌芽期~新梢伸長期に防除を行う。

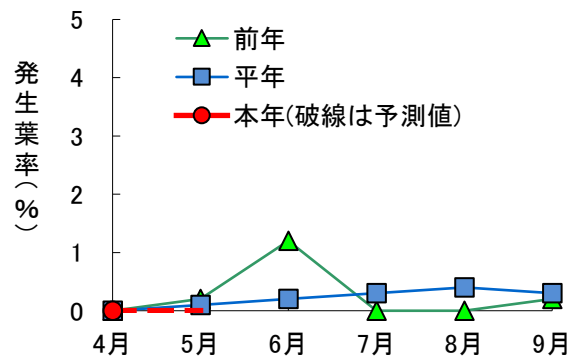


図1 ブドウ黒とう病の発生推移

2. ベと病

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1参照）

発生葉率：0%（平年0%、前年0%）

平年比：並（±） 前年比：並（±）

(2) 5月の気象予報

降水量がやや少なく、やや少発生の条件（-～±）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 罹病葉は伝染源となるため、必ず除去し、園外に持ち出して適切に処分する。

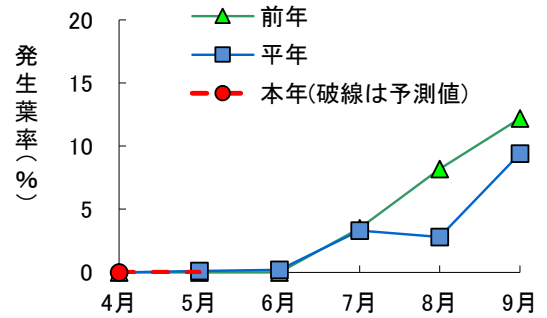


図1 ブドウベと病の発生推移

茶

定期調査7圃場

調査日：4月14～15日

1. カンザワハダニ

[【概要に戻る】](#)

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1参照）

発生葉率：0.3%（平年5.2%、前年6.7%）

平年比：少（-） 前年比：少（-）

(2) 5月の気象予報

気温が並、降水量はやや少なく、やや多発生の条件（±～+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 生息部位である葉裏へ薬液が十分にかかるように丁寧に散布する。

(2) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一薬剤は年一回の使用とする。

(3) その他は特記事項を参照。



定期調査圃場の様子

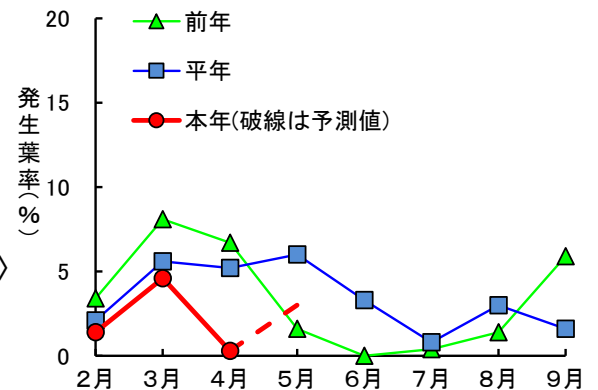


図1 カンザワハダニの茶での発生推移

2. クワシロカイガラムシ

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査

・雌成虫（4月調査：平年値はH30～R2の3か年平均）

発生株率：2.9%（平年14.3%、前年4.3%）

平年比：少（-） 前年比：並（±）

・雄繭（5～9月調査予定：図1）

(2) 5月の気象予報

気温が並、降水量はやや少なく、やや多発生の条件（±～+）

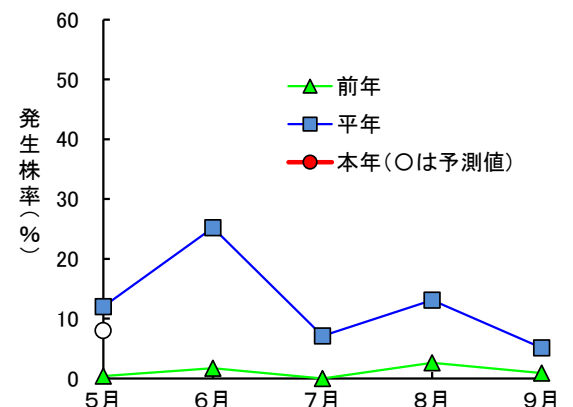


図1 クワシロカイガラムシ(雄繭)の茶での発生推移

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照。

3. チャノキイロアザミウマ

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の実況

① 定期調査（図1参照）

虫数：0頭/4ヶ所（平年1.9頭、前年2.4頭）

平年比：やや少（-～±） 前年比：やや少（-～±）

(2) 5月の気象予報

気温が並、降水量はやや少なく、やや多発生の条件（±～+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 5月中～下旬にかけて発生が増加するため、一番茶摘採後、

二番茶萌芽～開葉初期の防除を徹底する

(2) 幼虫は葉裏に生息することが多いため、葉裏へ薬剤が十分にかかるように丁寧に散布する。

(3) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。

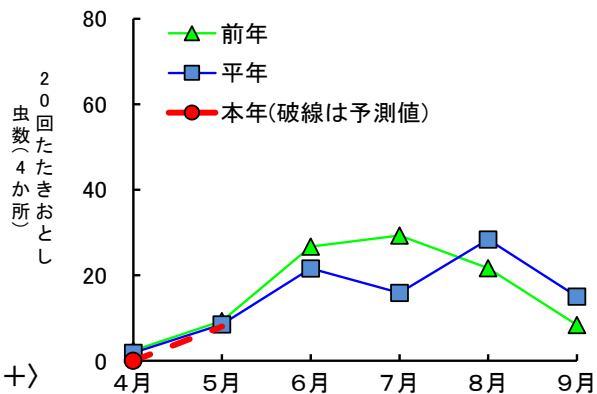


図1 チャノキイロアザミウマの茶での発生推移

4. チャノミドリヒメヨコバイ

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の実況

① 定期調査（図1参照）

虫数：0.1頭/4ヶ所（平年0.2頭、前年0.1頭）

平年比：並（±） 前年比：並（±）

(2) 5月の気象予報

気温が並で、並発生の条件（±）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 5月中～下旬にかけて発生が増加するため、一番茶摘採後、

二番茶萌芽～開葉初期の防除を徹底する。

(2) 幼虫は葉裏に生息することが多いため、葉裏へ薬剤が十分にかかるように丁寧に散布する。

(3) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。

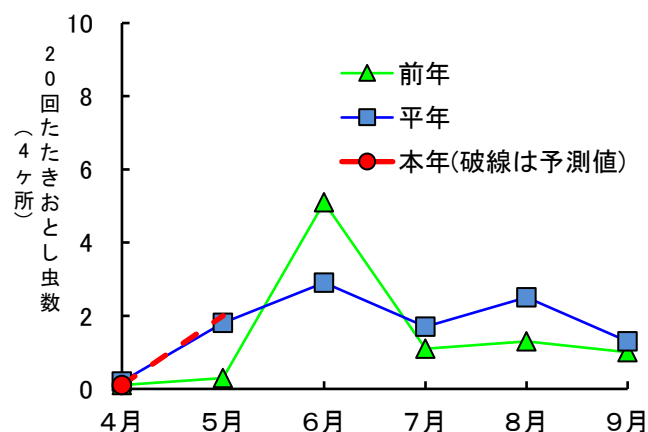


図1 チャノミドリヒメヨコバイの茶での発生推移

連絡先：佐賀県農業技術防除センター 病害虫防除部

〒840-2205 佐賀市川副町南里1088

TEL (0952) 45-8153 FAX (0952) 45-5085

Mail nougyougi.jutsu@pref.saga.lg.jp

ホームページアドレス <https://www.pref.saga.lg.jp/kiji00321899/index.html>

